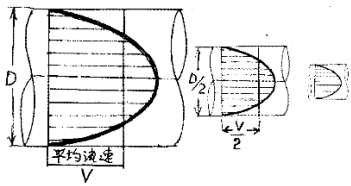
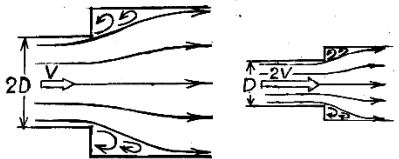


「『配管設計』実用ノート」(978-4-526-07682-4)  
【正誤表】

本書内に下記誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

頁、行、図番	誤	正
25 頁 図 2.3.1	 <p>流れの相似(動粘性係数は同一)</p>	 <p>流れの相似(動粘性係数は同一)</p>
31 頁の左列 下から 17 行目	…輸送能力…	…損失水頭…
31 頁の左列 下から 16 行目	しかし、内径 5 m の管の断面積 $S$ は $19.6 \text{ m}^2$ で、開水路の流路の断面積 $12.5 \text{ m}^2$ より、57% も大きい。これは、開水路に損失の基となる壁が部分的にないことが利いている。	(左記の文を削除する)
31 頁の左列 下から 2 行目	…に示す。	…に示す(流速、流量の変化も同じ)。
31 頁の右列 最終行	…1.22 倍になる。	…1.22 倍になる。また、流量最大となるのは、 $\theta$ が $308^\circ$ のときである。
31 頁 図 2.6.5 のキャプション	…輸送能力	…流体平均深さ
38 頁の右列 上から 3 行目	$p'_1$ 、 $p'_2$	$P'_1$ 、 $P'_2$
67 頁 図 4.4.4	サポート高さをポンプ中心に合わせる	サポート高さをポンプ中心に合わせる(ポンプがポンプ中心 EL で固定の場合)
73 頁の左列 上から 3 行目	…梁上面…	…梁下面…
下から 8 行目	…(図 4.7.3)。	(左記の語句を削除する)
右列上から 5 行目	…図 4.7.2…	…図 4.7.3…

81 頁の左列 図 5.4.3 内の式	$= \frac{1}{4} \left\{ R^2 - \left( R - \frac{D}{2} \right)^2 \right\}$	$= \frac{1}{4} \pi \left\{ R^2 - \left( R - \frac{D}{2} \right)^2 \right\}$
83 頁の左列 図 5.5.1	$L_I = \max \left( d, t + t_n - \frac{d}{2} \right)$	$L_I = \max \left( d, t + t_n + \frac{d}{2} \right)$
84 頁の左列 下から 11 行目	…、耐圧上必要な厚さ	…、耐圧上必要な厚さ(ただし、付加厚さ A を加えない)
92 頁の付表 3 重さまたは重量	= kgf	= 0.102kgf
104 頁の左列 下から 7 行目	高温時反応 :	高温時反力 :
107 頁の右列 下から 9 行目	$F_{BC}$	$F_{BG}$
107 頁の右列 下から 8 行目	$F_{BC}$	$F_{BG}$
107 頁の右列 下から 6 行目	$F_{CY}$	$F_{CX}$
114 頁の左列 上から 10 行目 式(7.5.1)	$M = 8 WL/8$	$M = WL/8$
115 頁の左列 下から 6 行目	7.3 節	7.4 節
116 頁の右列 下から 4 行目	せん断応力 $\tau$ は小さいので省略。	(左記の文を削除する)
120 頁の付表 4 「片持・集中」の「せん断力図 曲げモーメント図」		
121 頁の付表 5 リングの「断面係数 Z」	$\frac{\pi (d_2^4 - d_1^4)}{32 d^2}$	$\frac{\pi (d_2^4 - d_1^4)}{32 d_2}$
126 頁の右列 下から 12 行目	(付表 3 参照 (p. 92))	(付表 4 参照 (p. 120))
132 頁の左列 下から 15~16 行目	…すること) (図 8.5.1)、微小開度の減圧弁、円柱群…	…すること、微小開度の減圧弁 (図 8.5.1)、円柱群…

141 頁の左列 18 行目の式 (9.1.4)	$2\mathbf{Fe(OH)}_2 + \frac{1}{2}\mathbf{O}_2 = \mathbf{Fe}_2\mathbf{O}_3 \cdot 2\mathbf{H}_2\mathbf{O}$	$\mathbf{Fe(OH)}_2 + \frac{1}{2}\mathbf{H}_2\mathbf{O} + \frac{1}{4}\mathbf{O}_2$ $= \mathbf{Fe(OH)}_3$
171 頁 図 10.9.5 内の 文字	既定リフト	規定リフト
239 頁の索引右 側	流速 (FAC)  連続の式……22	(左記の語句を削除する)  連続の式……23